ルドルフ・シュタイナー

「植物」について
「動物」について

〔目次〕

■ルドルフ・シュタイナー
「植物」について

・GA 60-6 「植物界における霊」
・GA 230-7/8/9
『宇宙言語の協和音としての人間』
・GA 327-1/2/3/4「農業講座」

■ルドルフ・シュタイナー
「動物」について

・GA 97-31「動物の魂」
・GA 104a-12「動物の16のグループ」
・GA 106-8「動物の4つの形態」
・GA 136-9「惑星と動物の集合魂」
※コリスコ『動物学』『動物の12のグループ』

神秘学遊戯団

■ルドルフ・シュタイナー
「植物」について

・GA 60-6 「植物界における霊」
・GA 230-7/8/9
『宇宙言語の協和音としての人間』
・GA 327-1/2/3/4「農業講座」

シュタイナーはゲーテの「原植物」の視点を継承・発展させ、
植物を単なる物質的な存在ではなく、
霊的・宇宙的な力の現れとして捉え、
植物界は地球の「魂の世界が可視化されたもの」と表現している。

植物は地球の意識器官であり、宇宙と大地をつなぐ媒介者であり、
現代の化学肥料や機械的な農業が
土壌・植物・人間の生命力を弱めていると警告。
生命全体のつながりの中で植物を敬う態度を促している。

また、植物を観察することは、
人間自身の霊的成長
（種子→発芽→開花→結実のプロセス）とも深く結びついている。

そうしたシュタイナーの「植物」についての視点を
主にGA 60・GA 230・GA 327を中心に概観する。

1. 植物の基本的な霊的構造（三層性／三重性）

シュタイナーは植物を
根／茎・葉／花・果実という
三層性／三重性としてとらえている。

○根の領域：
大地（鉱物界）と強く結びつき、
重力に抗して下方へ伸び、土壌の力を吸収する。

○茎・葉の領域：
光と空気の中間領域。
エーテル体（生命力）が最も強く働く部分で、成長・代謝の中心。

○花・果実の領域：
宇宙的な力（光・熱・星の影響）が強く働き、
繁殖・種子の領域であり、アストラル（星界）的要素が現れている。

この三層は、人間や動物の構成要素
（物質体・エーテル体・アストラル体）と対応し、
植物全体が地球という有機体の器官であると見なしている。

2. 樹木の特異な位置づけ

植物は「大地が植物化した高い存在」として
詩的かつ霊的に捉えられている。

○樹木の幹は「突き上げられた土壌」である。

○草本植物が土壌から直接生えるのに対し、
　樹木は幹自体が「大地の盛り上がり」として機能し、
　その上に葉や花（小さな植物群）が展開している。

○形成層が活発に働き、
　木質を形成しながら大地の力を上方へ持ち上げる。
　これによって、樹木は地上に第二の生命圏を創り出し、
　つる植物・鳥・昆虫などの多様な生命を育んでいる。

3. 植物と宇宙・元素霊の関係

○植物の成長は宇宙の力（太陽・月・惑星）と深く結びついている。

・珪酸（ケイ素）は
　遠い惑星（火星・木星・土星）の影響を受け、光や形を整える。
・石灰（カルシウム）は
　近い惑星（月・地球）の影響を受け、繁殖力を強める。

○元素霊（自然霊）が植物の成長を支えている。

・グノーム（地の霊）：根の領域
・ウンディーネ（水の霊）：葉の化学変化
・シルフ（空気の霊）：光を運ぶ
・サラマンダー（火の霊）：花や熱の領域

以下、各講義からのポイント。

●GA 60-6 「植物界における霊」から

19世紀の唯物論的植物学（細胞説など）と対比させながら、
植物を「地球の感覚器官」として位置づけ、
地球が一つの生きる有機体として描かれている。

植物を単独で考えるのは誤りであり、
人間の指や髪の毛が人体全体の一部であるように、
植物界は地球全体の有機体の一部なのである。

また、地球は「死んだ岩」ではなく、
生きる全体（人間・動物・植物・鉱物を内包）であって、
植物は地球の「皮膚」や「感覚器官」のような存在である。

植物の茎は地球の中心に向かい、
地球から力を放射状に引き出している。

植物は地球の目・耳などの感覚器官であり、
地球が太陽の霊的影響を受けて思考・感情を持つための器官である。

春に植物が芽吹くのは、
地球が太陽の霊的活動を通じて「考える・感じる」ためであり、
植物自体に魂や意識があるわけではない。

太陽の霊的存在が地球に流れ込み、植物を通じて感知される。
植物は地球の「自我中心」（地球の自我）に向かって織りなされ、
地球の自己意識を支えている。

植物は地球の「思考・感情のオーラ」を織りなし、
太陽霊と地球霊の出会いを可能にしているのである。

●GA 230-7「植物界の神秘と元素霊の役割」から

植物の成長は「目に見えない元素霊の働き」によるプロセスである。

・グノーム（地の霊・根の霊）：
根の領域で働き、生命エーテルを媒介。
地球の湿った土壌を嫌い、その反発力で植物を上方へ押し上げる。
「グノームは地球を嫌うため、植物は根だけを土に残し、地上へ伸びる」。
根で宇宙の理想形（光・熱・星の影響）を感知し、
冬にそれを守る「精神的な産婆」役割を有している。

・ウンディーネ（水の霊）：
葉の領域で化学エーテルを司り、
植物が萎れないよう、物質の結合・分解を「夢見ている」。
水と空気の境で星・太陽・光を夢見て、葉から植物全体を形作る。

・シルフ（空気の霊）：
光エーテルを植物へ運ぶ光の担い手であり、
鳥の飛行が作る「宇宙の音楽」を聞き、
植物に光を織り込み、理想形を形作る。

・サラマンダー（火の霊）：
熱エーテルを花・花粉へ運び、
蝶や昆虫の軌跡を追い、雄的な宇宙の種子を準備する。

花の中では「受精」は起こらない。
花粉は火霊が運ぶ「雄的な準備」に過ぎず、真の受精は冬の地下で、
火霊が運んだ熱とグノームが守った理想形が結びつく。
地球は「母」、天界は「父」であって、
ゲーテの直感（花の「結婚」を不自然に感じたこと）を霊的に裏付けている。

●GA 230-8「元素霊の善性・悪性と植物の毒」から

元素霊には善性と悪性の両面があり、
善性は植物・鉱物界に留まり、

悪性は動物・人間界へ近づいて寄生や毒を生む。

・シルフの悪性の例：ベラドンナ
ベラドンナは、その花の中でシルフに『キスされた』植物である。
それにより、本来善性の汁液が毒汁に変わった。
シルフが本来鳥や上方の領域で使う力を
下方（植物の花）へ持ち込んだ結果、毒が生まれる。
人間や一部の動物には致命的だが、
鳥（ツグミなど）にとっては栄養源となる。

○火霊の悪性の例：毒アーモンド
火霊が蝶の領域の衝動を果実へ持ち込むと、仁（カーネル）が毒化する。
一方、善性の場合は果肉が「焼き尽くされ」良質な核を生む。

元素霊は植物の変形を支えながら、
誤った「領域の置き換え」によって毒や寄生虫を生む。
これが人間の脳形成や自然のバランスにも必要である

●GA 230-9「元素霊の内面的体験と植物への働き」から

人間は睡眠中に元素霊の「言葉」を無意識に受け取っている。
これらの言葉は、人間の身体の各系
（運動系・代謝系・リズム系・神経感覚系）に響く「世界の言葉」となり、
植物界を通じて宇宙の霊的プロセスを地上に降ろす。

○グノーム：
「私は根の生命力を保持する。それが私の身体の形を創る。」
地球を「空洞」として感じ、鉱物（金・水銀など）を通じて
宇宙の出来事を鏡のように映す。
月相（満月・新月）で敏感に反応し、植物の根の安定を保つ。

○ウンディーネ：
「私は水の成長力をかき立てる。それが私の生命の物質を形作る。」
分解（腐敗）を「輝く色」として吸収し、植物の水の成長力を支える。

○シルフ：
「私は空気の生命力を飲む。それが私の存在の力を満たす。」

○火霊：
「私は火の努力する力を消費する。それが私を魂-霊へ解放する。」

●GA 327-1「植物の繁殖力と宇宙的背景」から

植物は、繁殖力を持ち、次の世代を生むが、
これは月・金星・水星の影響を介したカルシウム循環による。

植物は「高等な自然界の食物」としても機能するが、
繁殖力自体はこれとは独立している。

植物の成長は地球上の現象ではなく、宇宙全体の反映である。

●GA 327-2「大地の諸力と宇宙の諸力」から

植物成長の核心は宇宙的力と地球的力の相互作用である。

遠い惑星（火星・木星・土星）や太陽の影響が土壌の下から働き、
根に硅酸（シリカ）を介して取り込まれる。
硅酸は「生命エーテルと化学的影響」を土壌にもたらしている。

月・水星・金星が太陽影響を修正し、
地上で「葉・花の熱」として働く一方、地下では「根の熱」となる。

土壌は人間の「横隔膜」のような器官であり、
植物は土壌の「腹部」に上向きに生長し、
人間とは逆の「頭を下にした」姿である。

●GA 327-3「物質を通じた宇宙・地球力、炭素とエーテル」から

植物の炭素構造はエーテル体によって貫かれ、生命の担い手となる。

葉・花は地球的要素が形作り、
種子は宇宙的要素が「混沌」の中で宇宙全体を映している。

緑の葉は地球的形態に太陽の宇宙力が加わったものであり、
花の色（赤＝火星、黄＝木星、青＝土星）は惑星の宇宙力を示している。

●GA 327-4「土壌のエーテル的生命と植物の「寄生的」成長」から

植物成長は土壌の生き生きとしたエーテル生命に依存している。
堆肥・腐植土は土壌にエーテル生命を与え、
植物を「死んだ土壌」に植えないためのものである。

植物は本質的に土壌の寄生者であり、
植物成長はすべてやや寄生的性格を持ち、
生きている大地の上に寄生するように育つ。

樹木は、普通の一年草と異なり、
「腐植に富んだ土の山が上方に盛り上がり、
植物を自らのエーテル生命で包む」ような存在であり、
樹皮・幹は土壌の延長で、エーテル生命が「外皮」となる過程である。

■ルドルフ・シュタイナー
「動物」について

・GA 97-31「動物の魂」
・GA 104a-12「動物の16のグループ」
・GA 106-8「動物の4つの形態」
・GA 136-9「惑星と動物の集合魂」
※コリスコ『動物学』『動物の12のグループ』

シュタイナーは、動物界を
動物の体を「機械装置」や「遺伝の機械」として説明する
機械論的・唯物論的な近代生物学とは根本的に異なり、
霊的・魂的な視点からとらえている。

まず、人間と動物の関係についていえば、
「人間は動物界全体である。動物界全体が人間である」
というように、
シュタイナーは、動物界を「人間の分化した姿」と位置づけ、
逆にいえば、人間を動物界全体の
「統合された原型」として位置づけている。

人間は頭部（神経・感覚系）、胸部（律動系）、腹部（代謝・四肢系）
という三分節による組織構成をもち、
思考・感情・意志が統合された存在としてとらえられていて、
各動物群はこれらのうちの一側面を極端に発達させた存在で、
動物は本能に縛られ、特定の環境に特化しているため「不自由」だが、
人間は直立二足歩行により抽象的思考の器官を獲得したとされている。

また動物は人間のように自我は有していないのだが、
（人間と同様、物質体・エーテル体・アストラル体は有している）
動物界には集合魂があり、
個々の動物は種全体の霊的実在に属し、
人間の本能・情念の16群に対応した
16の主要グループという枠組みも示唆されている。

動物の形態や習性は、
人間がかつての時代にアストラル体内で抱えていた
一面的な情念・衝動を物理的に凝固させたもので、
動物は人間の「過去の投影」でありながら、
集合魂は本能的な賢さを持ち、
個体は死後その魂を集合魂に還される。

16の主要グループといっても、それらは
哺乳類・鳥類・爬虫類といった現代の分類学とは異なった
霊的・形態的な分類であり、
人間の本能と情念の16のグループと同じく
動物にも16のグループがあるということで、
動物学はいつか、これら16のグループが
霊的世界からどのように徐々に『沈殿』したかを

理解するようになるだろうといっている。

その16グループの具体的なリストや
各グループに割り当てられた動物種の名前は挙げられていないが、
それらの主要な4つの原型が挙げられている。

「牛」「獅子」「鷲」「人間」であり、
これらはヨハネの黙示）の4つの黙示録的生き物に由来する象徴で、
人間進化の重要な段階*を表している。

ちなみに「人間」は「牛」「獅子」「鷲」のもつ
エーテル的形成力のブレンドとしてできあがったとされる。
レムリア時代に動物が「早く沈殿」したのに対し、
人間はこれらを内的に保持・洗練して個我を発展させたのである。
しかし動物を「下等な存在」と見なているのではなく、
人間進化の霊的必然として位置づけている。

獅子の体・人間の顔・鷲の翼・牛の要素をもったスフィンクスは、
4つの統合を象徴する古典的なイメージである。

また、シュタイナーは黄道十二宮を単なる占星術的な星座ではなく、
霊的宇宙の12の力の表現として捉えているが、
動物界ではそれが特に集合魂や情念・本能の外的な「顔貌」として現れ、
動物の形態・習性が黄道の霊的な力によって形づくられるとされ、
動物は人間の「分化した一側面」であって、
12群全体が人間の統合された原型を鏡のように映しているという。

なお、オイゲン・コリスコは、
そのシュタイナーの視点をより具体化し、
シュタイナーの三分節化された有機体の観点を
「Zoology for Everybody」シリーズとして
動物分類の「鍵」として展開しているが、

『The Twelve Groups of Animals』では、
動物界を12の主要群に分け、
三分節化の理論（頭部／律動／代謝・四肢系）と
繰り返しの法則を適用している。

このコリスコの「動物学」については、
とても面白いのであらためてとりあげることにしたい。

〇講義内容から

・GA 97-31「動物の魂」
　（1907年3月16日）

「私たちが動物の魂について明確に理解したいのであれば、まず人間との違いから始めなければなりません。

人間と動物の魂のさらなる違いは、人間であれば一人ひとりの「伝記」を書くことができますが、動物にはそれができないという点です。これは非常に重要なことです。自分自身がさまざまな存在に対してどのような関心を抱いているか考えてみてください。人間に対しては「個人」としての関心を向けますが、動物の場合、それと同じ関心は「似たような個体の集団全体」に対して向けられていることに気づくでしょう。

獅子を例に考えてみてください。獅子の祖父、父、息子、孫……これらに対して、あなたはみな同じ感情を抱くはずです。しかし、この考えを人間に当てはめようとすれば、それは馬鹿げたことに思えるでしょう。動物の場合、その種全体の中に「一つの共通の魂」が生きています。あたかもあなたの10本の指が手の一部であるように、すべての狼たちは「狼の集合魂」の構成員なのです。」

「かつて人間が、現在のように肉体の鞘（さや）や霊的な芽を携えて生きていなかった時代がありました。レムリア期のことです。当時、最高次の存在はいわば「人間ー動物」のような存在でした。彼らは肉体、エーテル体、アストラル体を持ち、自我への傾向は備えていたものの、まだ自我そのものは持っていませんでした。神聖なる芽を受け入れる準備ができていた存在だったのです。

現在、人間の内側に生きている魂は、当時はまだ神のふところから離れてはいませんでした。それはまだ魂的・霊的な層に留まっていたのです。1000滴の水が入った器を想像してください。それらは互いに分離することなく混ざり合い、一つの塊（単位）を形成しています。そこに、一滴の水を吸収できる小さなスポンジを1000個用意して浸してみます。すると、それぞれのスポンジが一滴ずつで満たされます。これと同じように、人間の鞘が「神聖なる芽」を吸収したと考えてください。それによって、人間は初めて個性的で独立した存在になったのです。」

「動物の魂は「アストラル界」に存在しており、そのグループに属する個々のメンバーと一本の「糸」でつながっています。動物の集合魂がどのようにして生じるかを理解するためには、まず、何が人間を現在のような肉体的な存在に至らせたのかを明確にする必要があります。

かつて「神聖なる芽（霊的種子）」が降りてきたとき、それを受け入れる側の存在（器）の状態は非常に多様でした。多くは闘争のために特化して発達しており、また別のものは同じような形をしながらも、労働や忍耐などのために発達していました。そのため、さまざまな肉体は、その外見においても発達の度合いが大きく異なっていたのです。」

今日、昆虫などの「下等動物」として存在しているものは、地球の以前の転生（輪廻）の段階ですでに枝分かれし、独自に発生したものです。ここで私たちが問題にしているのは、魚類以上の動物についてです。

「神聖なる芽」が、待ち構えていた肉体へと降りてきたとき、それらの肉体は外面的には（内面的ではなく）およそ魚の段階にありました。当時、哺乳類はまだ存在していませんでした。その時代に生きていた人間は、半分泳ぎ、半分浮かぶようにして移動しなければならず、そのために「ひれ」のような器官を持っていました。

地上にある人間の体の中で起こった変化は、そこに宿った「人間の魂」によって引き起こされたものです。長い進化の過程を経て初めて、この体は現在のような神々しい姿へと変容を遂げたのです。

・GA 104a-12「動物の16のグループ」
（1909年5月17日）

「地球上の存在が、それぞれ全く異なる時期に進化の段階を通過することもまた、必要なことでした。

もし、アトランティス時代の初期において、人類の一部が「密度の高い」肉体へと降りていくことを望まなかったとしたら、人間の形態は当時のままに留まっていたことでしょう。つまり、あらゆる本能や欲望、情熱が、そのまま肉体の形として表現された状態です。

しかし、その時代に固体化し、硬化した存在がありました。動物とは、あまりに早い段階で硬化し、密な状態に入ってしまった存在に他なりません。人間が今日、アストラル体の中に抱いている欲望や情熱が、さまざまな動物たちの肉体として表現されたのです。

それぞれの動物群は特定の語るべき本能を発達させ、その中で「凝固」あるいは固体化しています。レムリア時代には哺乳類が登場しましたが、彼らは硬い形態へと凝固した「人間の情熱」なのです。私たちが内側に抱えているものが、さまざまな動物の姿という図像として、私たちの目の前に提示されているのです。

人間の場合、本能は次第に洗練され、私たちはそれを心の奥に隠すことができるようになりました。人間の最も卑俗な本能は、レムリア初期の自然界の激変（噴火など）の最中に、まず物理世界へと脱落していきました。いわば、人間の魂自体が物質の中で硬化してしまう前に、物理的な物質へと脱落、あるいは押し出された「最後の卑俗な本能」を象徴するのが、類人猿なのです。

馬などの一部の動物には、今日でも、頭部のエーテル体が物理的な頭部からはみ出しているという特徴が見られます。これはアトランティス時代の人間も同じでした。人間のエーテル体のある特定の点が、肉体の対応する部分へと収まったのは、ようやくアトランティス時代の最後の3分の1の時期になってからのことです。その時初めて、人間は霊（スピリット）にふさわしい肉体形態を発達させることができたのです。

人間の本能と情熱には16のグループがあり、それに対応して動物にも16のグループが存在します。動物学もいつの日か、これら16のグループがどのようにして霊的世界から段階的に「析出（沈殿）」していったのかを理解する時が来るでしょう。

・GA 106-8「動物の4つの形態」
（1908年9月10日）

「進化というものを最もよく理解するためには、人間がますます人間らしくなっていく一方で、動物たちはある特定の段階に留まったということをはっきりと認識する必要があります。

以前述べたように、人間は「月の力」の影響を受けて肺、心臓、喉頭を発達させました。また、これにオシリスとイシスがどの程度関わっていたかについても示してきました。ここで明確にすべきは、心臓、肺、喉頭といった高次の器官は、人間の高次の構成要素である「エーテル体」「アストラル体」、そして「自我」が、真に霊的な要素として一定の方法で協力し合ったからこそ発達できたという点です。

「天秤宮」の影響下で到達した時点以降、これらの高次の構成要素は、それ以前の時代よりもはるかに強く協力し合うようになりました。その結果、極めて多様な形態が現れることになったのです。

例えば、エーテル体、アストラル体、あるいは自我が特に強く働くこともあれば、肉体が他の3つの要素を圧倒することもありました。これにより、4つの人間タイプが形成されました。

1. 肉体を特に発達させた人々
2. エーテル体から刻印を受けた人々
3. アストラル体の性質が優勢だった人々
4. そして、強い特性を持つ自我人間

それぞれの人間は、自分の中で何が優勢であるかを表していました。これら4つの形態が成立した古代において、人は奇怪な姿（グロテスクな形）を目にすることもありましたが、霊視者はそれぞれのタイプの中に何が存在しているかを見出します。

あまり知られてはいませんが、この記憶を留めている描写も存在します。例えば、肉体的な性質が特に強くなり、それが上部に作用した人々は、その上部にその特徴を宿していました。下位の形態に完全に適合した何かが形成され、その作用を通じて、ヨハネの黙示録に登場する「牡牛」の図像に留められているような形が現れたのです。もっとも、それは退化した形態である現代の牡牛とは異なります。

ある時期に主に肉体によって支配されていたものは、牡牛の段階に留まりました。これは牡牛、および牛や雄牛といったこの属に属するすべてのものによって表されています。

肉体よりもむしろエーテル体が強く刻印され、心臓の領域が特に強力であった人間のグループもまた、動物界の中に保存されています。人間がすでに通り過ぎたこの段階は、獅子（ライオン）の中に保存されているのです。獅子は、エーテル体が強烈に活動していた人間グループにおいて作り上げられた型を留めています。

アストラル体が肉体とエーテル体を圧倒した人間段階は、退化してはいるものの、動きの速い鳥類の中に保存されており、黙示録では「鷲」の姿で描かれています。ここでは、優勢なアストラル性が斥けられ、鳥類という種として地上から舞い上がったのです。

自我が強くなったところでは、他の3つの性質の結合体と呼ぶべき存在が進化しました。なぜなら、自我はこれら3つの構成要素すべてを調和させるからです。このグループにおいて、霊視者が実際に目の当たりにするものこそ、スフィンクスの中に保存されてきた姿です。というのも、スフィンクスは獅子の身体、鷲の翼、牡牛の形態の一部を持っており、さらに最古の描写では、古代の爬虫類の形態を指し示す爬虫類のような尾さえ付いていました。そして前方には、他の部位を調和させる人間の顔があるのです。」

「これが4つのタイプです。しかしアトランティス時代になると、人間の形態が鷲・獅子・牡牛の性質から徐々に構築されるにつれ、人間としての形が優勢になりました。これらが完全な人間の形へと変容し、さらにアトランティス中期に存在した形へと徐々に変化していったのです。
これらすべての出来事を通じて、別のことも起こりました。4つの異なる要素、すなわち4つの形態が、人間の中で調和を保ちながら融合したのです。

1. 肉体の中には、牡牛の性質が存在します。これらは「天秤宮」の進化期まで発達した、優勢な諸力です。
2. エーテル体の中には、獅子の性質があります。
3. アストラル体（その優勢な力）の中には、鷲の性質があります。
4. そして最後に、自我の優勢な力、すなわち真の人間の性質があります。

個々の存在においては、これらの構成要素のどれかが優位に立っていました。それによって4つのタイプが生じたのです。しかし、さらに他の組み合わせに出会うこともありました。例えば、肉体・アストラル体・自我は同等でありながら、エーテル体が優勢である場合です。これは人類の特殊なタイプです。また、エーテル体・アストラル体・自我が優位に立ち、肉体がそれほど発達していない存在もいました。つまり、肉体よりも高次の構成要素が勝っている人間たちがいたのです。」

「肉体・アストラル体・自我」が優勢であった人間たちは、現代の男性の肉体的な祖先であり、「エーテル体・アストラル体・自我」が優勢であった人間たちは、現代の女性の肉体的な祖先です。他のタイプは次第に消滅していき、これら2つのタイプだけが残り、男性と女性の形態へと進化しました。
どのようにして、これら2つの形態だけが徐々に進化することが可能だったのでしょうか。それは、イシスとオシリスの力が作用する際の、その働きの違いによって起こったのです。」

・GA 129–9「動物の4つの形態」
（1911年8月26日）

「さて、主に鳥類を形成する際に現れるこれらの力と、『獅子の力』や『牡牛の力』が、人間の中で調和していると考えてみてください。それらがすべて一体となって人間本来の『ファントム（霊的雛形）』の一部となることで、この調和が現代の人間の形態をもたらしているのです。
鳥という全く異なる世界を考察してみれば、その構造全体が哺乳類とは根本的に異なっていることに、すぐに気づくはずです。今日は、他の動物たちの構造については深入りしません。
鳥の構造には、霊視的な視点から見ても非常に際立った特徴があります。哺乳類の場合、どこを霊視しても『アストラル体』が非常に強く発達しているのが見えますが、鳥の場合、霊視者の目に最も顕著に映るのは『エーテル体』なのです。
例えば、宇宙空間から降り注ぐ力に刺激され、羽毛や翼を形作るのはこのエーテル体です。羽毛は外側から形成されます。一本の羽が生まれるのは、地球から湧き上がる力よりも、宇宙空間から地球へ働きかける力の方が強いためです。羽の骨組み、つまり羽軸（うじゅく）と呼ばれる部分は、もちろん地球からのある種の影響を受けています。しかし、その羽軸に付随し、鳥の羽を構成しているものは、宇宙の力がもたらしたものなのです。
これは、毛に覆われた生物とは全く異なります。毛においては、鳥の羽とは反対に、地球から上方へと働く力が支配的です。毛が羽になることはありません。なぜなら、動物や人間の場合、宇宙空間から来る力は毛に対してほとんど影響を与えないからです。

この一見パラドックス（逆説）のような事実は、真実を的確に表しています。さらに詳しく述べるなら、『すべての羽は毛になろうとする性質を持っているが、

「宇宙空間から地球へと降り注ぐこれらの力がどのようなものかを知るには、他の力に邪魔されることなく、その力が特に強く働いている生き物はどれかを自問してみる必要があります。
私たちの身の回りには、地球の内側から来る『牡牛の力』や『獅子の力』の影響をほとんど受けず、逆に宇宙から地球の物質へと働きかける力がほぼ独占的に作用している生き物がいます。それが鳥類に属する生き物たちです。
現代の抽象的な動物学も、いつの日か認めざるをえなくなって驚くことでしょう。哺乳類に働く力と、鳥類（さらには広く、体外に卵を産むことで繁殖するすべてのもの）に主に働く力とは、全く別物であるということを。
このように繁殖を行うすべての生き物、特に鳥類においては、宇宙空間から流れ込む力が圧倒的に働いています。秘教の世界では、これらの力は一括して『鷲（イーグル）の力』と呼ばれています。」

「ある文化圏――例えば古代エジプト――が、人間進化という壮大な謎を人々の前に提示しようとしたと想像してみてください。その際、土星・太陽・月という進化の過程を経て生じた、真の人間である『原初のファントム（霊的雛形）』は、本来不可視のまま留まるべきものです。
しかし、その不可視の領域から、ある複合的な姿が形作られなければなりませんでした。それは、牡牛と獅子の形態に、鷲や鳥類が持つような翼を組み合わせた姿です。
人間進化の大きな謎を象徴するために意図された『スフィンクス』という像の、すべてを包括する重要性を思い起こしてみてください。それこそが、人類についての真実を内的に知っていた霊視的な文化が、当時の人々の前に提示したものだったのです。
スフィンクスにおいて個別に突き出しているこれらの特徴は、人間という性質の中では内的に織り合わされています。霊視的な視点で見ると、人間の形態は非常に不思議な外見をしています。
もし、獅子と牡牛の形に鳥の翼をあわせたスフィンクスを霊視し、その根底にある『人間のファントム』をそこに補ってこれらを織り合わせるならば、私たちの前には今日あるような『人間の姿』が立ち現れてきます。
ですから、霊視的な意識を持つ者は、一見すると人間には全く似ていないスフィンクスを眺めながら、自らにこう語りかけずにはいられないのです。『これこそが、私なのだ』と。」

・GA 136–9「惑星と動物の集合魂」
（1912年4月13日）

「秘教的な洞察が示すところによれば、多種多様な動物が存在する原因は、単に地球上にあるのではありません。むしろ、動物の種はその形態を宇宙空間から受け取っています。実際、ある種を生み出す力は、別の種を生み出す力とは異なる宇宙の方角からやってくるのです。
多様な動物の形を造り上げる力は、私たちの太陽系の他の惑星から、この地球という惑星へと降り注いでいます。私たちは、動物界全体を大きく6つ、あるいは7つの主要なグループに分けることができますが、これらの主要グループには、それぞれ高次の『集合魂』が存在します。
これらの集合魂が活動するための衝動は、私たちの太陽系に属する6つ、あるいは7つの主要な惑星の中にあります。つまり、動物の主要なグループを形成する力は、それらの惑星から精神的に働きかけているのです。このように述べることは、動物の『集合魂』という言葉が実際に何を意味しているのかを具体的に説明することでもあります。
それは、動物の中には、地球上ではなく、地球の外、つまり宇宙空間、とりわけ惑星の世界に属する存在たちの精神的な力が宿っているということを意味します。いわば、動物の主要な形態を司る支配者たちは、私たちの太陽系の諸惑星に住んでいるのです。彼らは、地球から適切な距離と正しい方向から力を及ぼすために、あえてそれらの惑星へと退きました。なぜなら、主要な動物の形態を正しく築き上げる力は、宇宙のそれらの方向からしかやってこないからです。

さて、もし惑星がこれらの力を地球に降り注がせるだけだったなら、現在のような動物界の多様性は生まれず、7つの主要な形態しか存在しなかったでしょう。かつて遥か遠い古の時代には、7つの主要な動物形態しかありませんでした。しかし、それら7つの形態は非常に流動的で、規定しやすく、形成途上の柔らかい可塑性に富んでいたため、ある特定の形が別の形へ、またさらに別の形へと容易に変容することができたのです。そして実際に、後の時代にそれが起こりました。

これらすべての力が相互に作用し合うことで、動物界の根源的な7つのグループが分化していきました。つまり、地球上の動物形態がこれほど多様になったのは、惑星の諸力が、動物たちの『集合魂』やその実際の居所であるという事実に由来します。これらの存在は、その中心拠点から自らの課題を遂行しています。なぜなら、そこからでしか、その役割を果たすことができないからです。

例えば、火星から働きかけるべき特定の動物形態の集合魂が、天界においてその位置を選んだからこそ、下の地球に対して相応の結果（形態形成）を及ぼすことができるのです。ここに、私たちの動物たちに多様性をもたらした力が存在します。

私たちが『動物の集合魂はアストラル界に見出される』という表現を使うとき、それは実際にはこういうことを意味しています。すなわち、秘教的な洞察によってある動物形態の集合魂を探そうとするならば、地球上ではなく、いずれかの『惑星』の上にそれを見出さなければならない、ということです。人間に関しては地球上に見出されるものが、動物に関しては、宇宙空間の惑星の中にしか見出すことができません。

例えるなら、地球上で何かを成し遂げようとする人間が、様々な視点を必要として自らをそれらに適応させるのと同様に、惑星に住まう集合魂もまた、そこから自らの力を分化させるために、黄道十二宮の前にある宇宙空間を通過しなければならないのです。」